

これは会議主催者による公式議事録ではありません。引用はお控えください。
This is not an official record by the meeting organizers. Do not quote.

タイトル	排出削減の取り組み：セクターアプローチ Addressing emissions reductions : a sector approach
主催	World Business Council for Sustainable Development (WBCSD)
日時	2004 年 12 月 10 日(金)13 時～ 15 時
主要討論者	<ul style="list-style-type: none"> ・ Marco Bedoya (CEMEX) ・ Bruno Vanderborgh (Holcim) ・ Hiroshi Ozaki (大阪ガス) ・ Hirofumi Kazuno (関西電力)
傍聴者	約 20 人
目的	CDM プロジェクトを行う際に重要になってくる追加性 (additionality)、ベースラインシナリオについて、ビジネスでの実践と適用可能性の側面からの評価を行い、また追加性を決定、例証するための洞察を提供する。同時にベンチマークの有用性と適用可能性についての評価を行う。
発表の概要	<ul style="list-style-type: none"> ・ ベンチマーク作成の必要性と、どのようなベンチマークが有用になってくるかの説明 ・ マルチステークホルダーアプローチの有用性について ・ ガス業界の京都議定書への取り組みとパフォーマンス基準のベンチマークの在り方について ・ グリッド電力におけるベースラインシナリオの設定の困難さとベンチマークシナリオの作成による解決方法について
主要な論点	<p>Marco Bedoya (CEMEX)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ ベンチマークとはプロジェクトをベースラインと比較できるようにするためのパフォーマンス基準・代用物 (proxy) であり、ある期間に渡ってある地理的地域の中で幾つかの似たようなプロジェクトに適用可能なものである。方法論として、与えられた地域と時間の中でそれぞれ代替物のリストを作り、違うレベルの排出率を設け、その基準で排出率を比較するものである。 ・ 目標・政策・メカニズムなどコミットメントの違いを設定し、重要な排出源に焦点を当てるようにする。EU-ETS のためのパフォーマンスに基づいた許容排出枠を設定する。また生産の変化を考慮し、更なる排出削減を奨励する。マルチプロジェクトベースラインを設定し、広範な参加を促す。 ・ 追加性をパフォーマンス基準に統合するには適切にプログラム参加者とバランスが取られるように設定基準を設ける必要がある。 ・ セメント製造業では、製造プロセス、燃料・電力使用からの CO₂ 排出があり、主に原料供給、焼成工程、研磨、セメント添加工程などである。CDM/JI プロジェクトとしての CO₂ 削減ポテンシャルは、エネルギー効率改善、プロセスの変更、燃料転換、製造時に CO₂ 排出の少ない添加剤のブレンドが挙げられる。 ・ セメント製造業におけるベンチマーク作成には、ベースラインの積み重なり、カバーされるプロジェクトタイプ、ベースラインの寿命、データの有効性、ベースラインの説得性などが重要因子であり、複雑であるが、概して、ベンチマークよりも炭素効率の高いプロジェクトはクレジットが得ら

これは会議主催者による公式議事録ではありません。引用はお控えください。
This is not an official record by the meeting organizers. Do not quote.

れるであろう。

Bruno Vanderborght (Holcim)

- ・ベンチメーキングには2つのアプローチがある。1つは、事業者の意思、動機（追加的要素）とこれによる削減量の影響（ベースライン的要素）の評価であり、もう一つは、プロジェクトパフォーマンス（追加性・ベースラインの両要素含む）の評価である。
- ・マルチステークホルダーアプローチはクリーン技術、SDの思考を有し、長期的視点で、与えられている利益を侵すものではない。排出量を減らすという京都議定書の目的に合致し、クリーンエネルギーとSDを促進する。またシンプルで透明性、客観性を持ち、立証可能で公平である。
- ・ベンチマークをベースにしたセクターを開発するステップは以下のとおりである。
 - ・ステップ0：マルチステークホルダーアプローチ
 - ・ステップ1：パフォーマンス指標の定義
 - ・ステップ2：パフォーマンス上の定量的なデータの収集
 - ・ステップ3：定性的コントロールや検証
 - ・ステップ4：パフォーマンスの統計的解析
 - ・ステップ5：多数のステークホルダープロセス
 - ・ステップ6：クリーン技術性能標準
 - ・ステップ7：新方法論、PDD作成とMethパネルとEBへの提出
- ・単位生産あたりのプロジェクト排出量（原単位）が性能標準を下回れば、プロジェクトは追加的で、適格であると言えよう。つまり、CERの量=(原単位 - 性能標準) × 生産量となる。

Hiroshi Ozaki (大阪ガス)

- ・日本ガス協会の自主行動計画として、LNGへの転換、LNGターミナルでのエネルギー節約などを行ってきており、1990年で73g CO₂/m³から2010年には23g CO₂/m³にする。
- ・パフォーマンス評価のベンチマークとしては、排出絶対量よりも単位生産あたり、あるいは単位供給あたりの排出係数がより有用である。またサイズ、タイプ、地理的条件などのデザインを考えるべきである。
- ・プロジェクト評価のためのベースラインのベンチマークとしては、需要サイドの排出に焦点をあて、効率的なエネルギー利用を強化することが重要である。
- ・グリッドからの電力購入によるCO₂排出を評価するために、グリッド平均の炭素排出係数(AEF)とマージナル炭素排出係数(MEF)を比較すると、需要サイドの排出量推計にはAEFが、需要サイドの電力節約のための削減量の推計には、MEFが適していると考えられる。

Hirofumi Kazuno (関西電力)

- ・系統電源供給プロジェクトのベンチマークとは、バリアテストを通して得られたものがプロジェクト固有のベースライン候補であるのに対し、多くのベースライン候補の中からベースラインに代わるもの(proxy)を設定することを通

これは会議主催者による公式議事録ではありません。引用はお控えください。
This is not an official record by the meeting organizers. Do not quote.

	<p>して得られるものが標準的なベンチマークであろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 電力拡張計画の全体像を支配しているのは原子力であるが、場所により建設に10年以上もかかるため、これらの長期的な影響はベースラインシナリオにも考慮されなければならない。 ・ 需要量の時間的变化に系統全体の電源が影響を受けるため、系統電源供給プロジェクトのベースラインシナリオを定義することは難しく、不可能である。 ・ CDM プロジェクトによりどの電源が代替され、炭素排出係数の値をどうするかを見極めるため、ベンチマークが必要である。特に系統管理者からの情報が十分でなく供給システムに適用できるデータが得られないところでは、特にベンチマークの必要性が高い。 ・ このベンチマークはベースラインの代わりになるもの(proxy)であり、特定されたベースラインと比べ、厳重で、保守的であるべきである。一方で、この代わりが、トランザクションコストを低く抑え、CDM プロジェクトを加速させることが可能である。 <p><Q&A></p> <p>Q . 将来の新技术に対してどのように適用するのか？</p> <p>A . まずベンチマークを設定する際に技術発展を考慮に入れる。また実施期間にどのくらい自然にパフォーマンスが改善するのかを考慮に入れる必要がある。</p> <p>Q . DOE の confidentiality の問題について</p> <p>A . ベンチマークを発展させるための重要なファクターである。どのようなレベル、バランスを設定するかによるだろう。またどのくらいの参加者が参加して、どのくらいの量の CO₂ を削減したいのか。まだ方法論やプロセスがフィットしていない状態にある。さらに政治的問題も考えなければならないだろう。</p>
所感	参加者の多くが同業他社や研究者であったため、質問も実際にベンチマークの設定に当たっての実践的な質問が多かった。
資料	なし

報告：財団法人地球環境センター・社団法人海外環境協力センター / 文責：井上 智尊